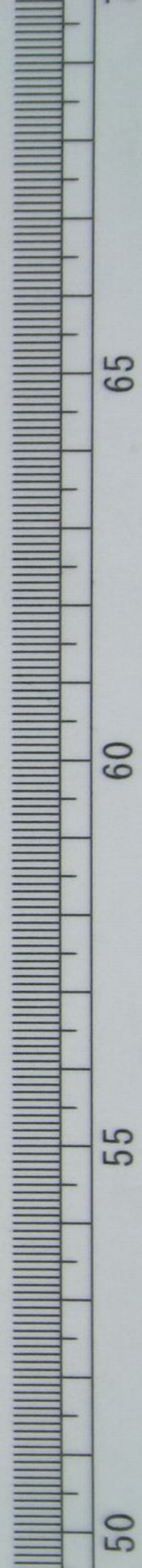


浪華史略

染壽延房著

初編

下



50

55

60

65

A414  
2

浪花史畧第一輯卷之二

東京 染崎延房編集

○ 暴論ぼうろんと説破せつぱして市正四将いちのまへししやうを召よひむる事こと

再説さいせつ片桐かとう且元かつもとの至妙しめうの良策りやうさくと献けんむとりのども淀君よどぎみ  
駿府すまふの遠謀えんぼうふ惑まどひされと只管ひますら勞らうと厭いとふとのと思おもひ込こみ  
故ゆゑふより渠かれが辞ことばを用もちひひのりずまを依よりて  
且元かつもとも諫いさめと甲斐かひふた支とと測はかり慶長けいぢやう十五年ごじゅうごねん八月はつげつ  
月つきより彼かの大佛だいはつと造立ぞうたつ為なさんと且元かつもと花洛はならくふ滞留たいりゆう

浪花史畧 初下一

48-7637

して諸國の木財を贖ひりとり或ハ豪富の寄進と  
 集め掌て番匠漆物師の属ハ最も名譽あるもの  
 のを救百人と雇入して佛像再建ハおよが程且  
 元智意あるのをあらず兼るハ正路実直あるを  
 夜役所の裡を離さず師令規則を嚴めせしむ  
 工夫とり人ども手と抜得ず殊さる豊臣恩顧の諸  
 侯ハ或ハ木石を寄附する所或ハ人夫を出し杯  
 多し助けとある支度くりし故豫て計算せしむ  
 金の銀の費も出さず且成業の進む支最も速あり  
 一かか此分ふして運びあふ近きハ落成ありと  
 且元いよく奮發し諸工を激しけるとあん徳  
 て次の年弥生ハ天皇既ハ御位を皇太子ハ讓  
 らせぬハ是と後水尾天皇と稱すとこふ依る大  
 御所ハ御末子右兵衛督義直郷十常陸介頼宣郷  
 十一男を相伴ハねる此月初旬ハ上洛ありて江戸將軍  
 秀忠公より井伊兵部少輔直政と名代として上京

あきむ此時家康公よりして西尾豊後守を使節と  
して大坂城へ遣はさるる則ち使者の口上ありて  
天皇御即位の御老翁とも厭はせられず両公達  
義直を伴ひて大御所あり上洛あり秀頼公も今  
年におや十九才にお成らせらるるまご皇都へ一回  
も列らせらるる一変もあらず依て御即位の拜賀として  
来る四月十四日参朝ありて然るべく事の序ふ二  
條の城にお御立寄在らせらるる久々にお大御所

あも御對顔ありせらせ御成長の御形容とも見あひ  
たりとの御変ありと演説あり及ぶお淀君御母子を  
發しれしが何れも是より返答致すべき旨挨拶ありて  
使節を返し給ふ跡にて急ぎ老臣等を召寄せて大御  
所より使者の趣き依奈何せんといひせぬ人び奸臣  
大野父子成をとり或は渡邊内藏介荻野道喜と喚  
ぶ者進と出づるやう御参内の左まれ右まれ二條の  
城へ君を呼付け出仕とせよと言ひぬむりの使者の口上

心得こころえぐこ太閤たごう在世ざいせいのとき時ときのご五大老ごおほらうのひとり一人ひとりゆき常じょうに  
 大坂おおさかへきん勤仕きんしせと先君せんきんのい遺い言ごんをそむ背そむきてきう若君わくきん年とし  
 長ながあらくもいままご太政たいていをかへ還かへさんともともせずみづか自みづからてん天下てんか  
 のけん権けんをたす握たすりて今いま大所おほしよ所よとい稱いせららる武ぶ威いをた誇たりて  
 始はじめめは忘わすれは初はつのごと如ごとくも無む禮れいある尚しやう是これもも忍しのぶ  
 べくんが何なにをしの忍しのばらるべけんさい幸さいひり家や康かう二に條じょうあら在あれ  
 ばふ不ふ意いあら起おこつと攻せう蒐そうらんあのらう老らう奴ぬがあ首くびをひ引ひ提たんと  
 何なに条じょう匹びつきと支しあらんと律りつもあげあるお大野おほの等らがこ此こ評ひやう  
 論ろんふせん煽せん動どうせられし何なにのし思し慮りよあらさし壯さう佼けうがお大野おほののけつ決けつ断だん  
 最ももよ時とき得とぐく失うひえ易やすきい至い急きうあら京師けいしへらん乱らん  
 入いのご御ご准じゆん備びあらりし然しからんといふよ淀君よどぎみ憤ふん激げきせら  
 わらくし既すでにて手て切きのけつ決けつ評ひやうあらばんとせしし其その折せりもは花  
 洛らくふりりて且かつ元げんがお大御所おほみよよりの使し節せつとし西尾さい豊ゆたか  
 入い入い未みのあ教きやうきう箇こ根こんとい傳つたへき人ひと听ききこ送くわりやす易やすきあ似に  
 てやす易やすからぬまた大所おほしよ所よのきん秘ひ題だいあらばこ此こ奉ほうふし至しりち城じやう  
 中ちゆうあらくご暴論ぼうろんあらんど起おこらんあのあ容よう易いかららる勢せいひあ

論ろんふせん煽せん動どうせられし何なにのし思し慮りよあらさし壯さう佼けうがお大野おほののけつ決けつ断だん  
 最ももよ時とき得とぐく失うひえ易やすきい至い急きうあら京師けいしへらん乱らん  
 入いのご御ご准じゆん備びあらりし然しからんといふよ淀君よどぎみ憤ふん激げきせら  
 わらくし既すでにて手て切きのけつ決けつ評ひやうあらばんとせしし其その折せりもは花  
 洛らくふりりて且かつ元げんがお大御所おほみよよりの使し節せつとし西尾さい豊ゆたか  
 入い入い未みのあ教きやうきう箇こ根こんとい傳つたへき人ひと听ききこ送くわりやす易やすきあ似に  
 てやす易やすからぬまた大所おほしよ所よのきん秘ひ題だいあらばこ此こ奉ほうふし至しりち城じやう  
 中ちゆうあらくご暴論ぼうろんあらんど起おこらんあのあ容よう易いかららる勢せいひあ

長七郎八郎

初下口

立ふらんも測りかざしと即刻京師を發足して大坂に  
 到りし果して手切きの評決ふあんとする所なれ  
 且元大いふ發きて淀殿御母子をとりめとて列坐の諸  
 臣み對ひくふやう御輝義の發きて且元具ふ兼  
 つりしに以の外の次第あり今徳川家を討んとする  
 とも智畧ふ長とる大御所あるは必勝あると思ひ  
 も寄らざ愁ひ干戈を動いて鞏下伐強が奉  
 らば成さば度もあく退くとも朝敵の免れ難

く当家の破滅とありぬべし然るぬだふ大御所ありまれ  
 より事を起しあが及逆ありと云ふを殺して征伐  
 ありん所の所心ゆゑ種々雅題と言ひかけて城中の士  
 小憤懣を起さしめんと計らるる小生豫て察する  
 故徳川氏よりの命令の忍びがさきも堪忍び怒を  
 慮して遠よも何卒当家を泰山の安きふ壺んと思へむ  
 あり然るは疎暴の挙動ありば必ず大御所の術中ふ  
 陥ん度疑ひありと是非を分けつ論ずれども尚淀

君あり御らるの解けざる御みえあるみぞ大野道犬我  
 と出で片桐氏の所存あり只に復讐のを計らるるが  
 奸智み長し徳川所父子今より百年俟たりとも幸  
 ろ天下の政權を秀頼公み渡まべれば只所家ごみ長  
 久あゝが渠が幕下み属せらるても和殿の本意と  
 せらるるやと詰問のわき冷笑ひ夫等の度み和殿等  
 が批判を受くべき且元あゝんや所詮兵威を示さぶ  
 決心いゝ居きと家康公の凡智みあらず且人望と得ら  
 れ一故豊臣恩顧の徳侯さん咸新恩と感ぜぬを  
 勘一介バ大に不在世のうち猥りみ兵端と用はが  
 たり彼君今の健うあきとど人壽の限りあらぬのあらと  
 ちや七旬みあせせめ人バ介むらりの余命の在るま  
 大御所薨したるひるが秀忠賢明み在るるも渠  
 と互角の勢ひを張は徳侯のうちみ大坂へ心を通ひ  
 輩も出来と怖るべきの戦ひあらず仍大御所は一

浪花史略

初下二

世せの只ただ穩便あんべんと計はかるこそ是これ万全まんぜんの策さくありやと心底しんてい疑うたが  
 まだ申まうし出いさば大所おほのひいき具員ぐいんの淀君よどぎみも実まことに理ことりや  
 思おもひれけん御簾ぎよかんの裡うちより宣のたまふやう且元なりもとのまゝ如ごと至き  
 極ごくの論ろんふ竹たけちさば多た切きら思おもひいらんが是これ君きみあひ免と  
 小角くさくふ上洛じやうらくあり残好ざんこうとあらず吾儕ごせいふ於おても何なんと  
 やら底意そこいの知しをぬ大所おほのひいき所ところふ會あひせん夏なつの心憂こころうい  
 是等これらの奈何いかんふ計はかふぞとすつとて且元なりもと首くびと下くだげ御ご  
 被かみりくとも何なんのまの御ごとと兼かね遊あそばさしきりて

愜あやふまど幸さいひ此節このせう加藤かとうをたしめ池田いけだ浅野あさの福島ふくしまの  
 四将しやう当地このちに滞留ちゆうりゆうする在あるはは伴ばんの四名よななを召めせられ  
 意見いけんを問とひせあひまがまの良策りやうさくもいりんとまの  
 淀君よどぎみ頷うなづきまひて更さらふ四将しやうを城しろ中ちゆうに招まき且元なりもと坐ます  
 小列こりつありて大所おほのひいき所ところよりの使節しせつの語ことき遂ついに一ひと演説えんさつを  
 一ひと仍さらて小生せうせい上洛じやうらくを只管ひたすら進すすめまのつまをさかども若君わかしき  
 らとを好このませぬらず最もつとも近年きんねん関東くわんとの御所ごしよ置心ちしん  
 得えぐくき廉れんもあさば不思議ふしぎの變へんの生なまぜんう又また夫それ

良花伝

初下





長下 (Nagashimo)

長下 (Nagashimo)

迎も測らまらず種々あまの苦念くねんを致いたせと雖いなも更さらみ且かつ元

が愚ぐふふふななふふををむむずずととままぬぬ仍なほくく所ところ母子ぼしああのの尊そん意いをを

悩なやままししめめぬぬ故ゆへにに兄あに等らをを召よせせめめひひししるる適あはは小

生なまがが不ふ省しやうをを佐たすけけてて当とう家けのの瑕う瑾きんをを相あひひららぶぶるる高かう論ろん

みみととをを預あづかりりししととままぬぬ四し将しやうのの手てをを拱こまききてておおののく

思し按あんのの辨べん多たししがが开ひらかか中ちゆうにに清きよ正せいのの他たにに先ま立たてて我

とと出いでで小せう生ぎゆう虎こ之の助すけのの昔むかしよりより古こ太た閤がくのの洪こう恩おんをを被かるる

度と蒼そう海かいよりよりもも尚なほ深ふかくく依よりり依よりり存ぞん意いのの在あららんん限かぎりりの

胃い衷ちゆうををそそししてて言こと上じやうままべべいい思おもふふ這こ回わい大だい御ご所しよよりより参

内うちをを勧すすめめららまましし秀ひで頼より公こうのの虚きよ弱じやくをを察さしし自じ然ぜん上じやう京

にに附つけけののいいよよくく比ひ興きやう階かい弱じやくのの君きみとと京きやう中ちゆうにに風ふう説せつし

てて当とう家けのの威い光かうをを拵しくくづづ倘たうししとと参まりり朝あああるるみみ於おか

ててのの家け康かう公こうもも右みぎ府ふ多たききとと先せん官くわんあありりととままぬぬをを以もて

君きみをを未ま坐ざみみ居い座ざををままんんざざとと万まん座ざのの袂たもと候うみみ威いをを示ししし幕まくら下

のの如ごとくく知しららままぬぬとと言いふふ策さくああららんん更さら疑ぎひひあありり此このの兩りゆう端

のの謀ぼう畧りやくをを此こ方かたよりよりししてて拵しくくづづみみ上じやう洛らくああるるみみ如ごとくくいいふふし

景も参内まゐりの這回こゝろみ限かぎらず大御所おんごしよ帰國きこくありて後遊のちあそ  
 ざりとも苦くるしめず今度こんどの豊國とよくに大明神あきみへ御参詣ごさんぎ  
 小事こじよせて二條ふでうの城しろへ入いらせられ大御所おんごしよへ御對顔ごたいげん  
 浴すまば直すさる御駕ごぎやと回めぐらさる其日そのひのうちみ還御かえりまありて  
 渠うれの意表いひょうみ出でる以もつて總すべての方畧たてどて齟齬そごひ自みづかと君きみの  
 所置量どきりやうの露あつはるみ至いたるべし先まんを時ときの人と制せいさの確言くげん  
 もゆへに四月十四日しがつじゅうよっぴにちと俟まちべきみあらず只今いま破軍たげんの星ほしと操あそ  
三月廿八日の撰りみ勝の吉日ありて此日御發賣遊

ござるべし途中ちゆうちゆうの勿論もちろんも座席ざせき迄いたりて清正せいせいお側そばみ附従つきあひ  
 守護しゆごしまのらせひ上うへの関東くわんとのへろく武士ぶしが不意ふいと討う  
 んと討うつとも指さでもさする度ほどありて淀君よどぎみみも  
 安堵あんどありて疾々しやくしやく御準備ごじゆんび然しかるべしと智ちの勇氣ゆうあり  
 清正せいせいが此こゝろ一言ひとことを傍かたわらみうち听き居ゐりし池田輝政いけだてるまさ覚おぼへ  
 ず充みるしうち笑あはて加くわのかう高論かうろん極まめて可よし小生せうせい今いま  
おんごしよの大御所おんごしよの婿むこのま嚴まりたるも奚なんぞ豊臣とよとみの舊ふるし  
 恩おんと忘わすれん清正せいせいおん供ともせらるるも輝政てるまさもまこと侶りゆう

俱み御夷漆を仕らんと言へば浅野福島も齊しく  
 膝を我ませく咱們固より同意あるべし俱み御守衛  
 做んとすらみみぞ淀君ふい尚悖忒み人ど太閤在世の  
 頂よりして荒大名と喚れらる件の四将が附従ひ心  
 遣ひも在まらざらうと逐めり思ひ垂さきて秀頼上洛  
 ありづれの旨稍決定み及びいづが且元の脛裏みて  
 我が密策の行われ緯の茲み至りしうこの這田の事件の  
 氣をい何らと聊う愁眉を閑きうとぞ

○旧恩と忘むして加藤等孤君を陪従する事

却説まると大御所あり嚮ふ使節を遣はせし大坂より  
 の返答ありぬの豫て彼地にお問者を入れし秀頼上洛  
 ありや否やと竊うみ探索せらるる其者よりの注進  
 あり来る三月廿八日上洛と直きいまり加藤池田浅野  
 等の面々守護あり来るの報きあるべし大御所御機  
 嫌宜しからず彼面への関東より新恩と詔さす尚  
 大閤の旧恩も倍せり然るは秀頼が守衛して上京

ふ及ぶる条是偏ひ且元ぐ智謀ふ出る所あるんが如の如

く小彼面々秀頼を佐らうちの輒く大坂の潰ゆま

種々所工夫ふ及びつらうちを日限も近付く程ふ或

夜京師所司代ら板倉伊賀守勝重が父四郎左

工門あり者我偷りふ召させらるるふぞ何ま申せんと出仕

せし小所例ふ扣への本多佐渡守正信のを別ふ所用

の何の辨もあく只四方山の話説ふど是被とあらうち

み大御所の宣ふや其方の年もと我み齊しく思ひ

るが何り老後の望とやあらと思ひがけあく向ひくは

らま四郎左工門謹んふ不省の伴伊賀守の所司代

たるの大任と被り又次男ら主膳正の一万石の御

加恩ありて若年寄と相勤むる支家の面目武門の

冥加又此上やゆぎき臣が老後の願ひと言つらの通き

相応の御用もあらうが死をりて御恩我報たらと

思ふの外のいはずとさら我大御所所あひ只うち笑

て居あののを左右の所換授もそぞ是ようり世事の雑

候みあり又軍法の評論ふどうち籠らるる支の席

ふまゝ大御所の宣ふやう抑兵法ふ五間あり板倉

初るやと謗ひあ人が四郎左工門手と下げて聳て存ト

申さざとあん受けふ及ふみぞ大御所あめ笑ひせぬ

ひて板倉如きの武夫が五間を知らざる度やめある夫

五間との生間死間及間口間郷間是あり开が中ふ反

間の将たる者の用する策みて善く人の知る所なき

ども凡人の臣として誠忠の至極と言ふ所の偏み死

間ふ止まれり然れども用する者あり其故を奈何と

言ふみ殺のずして人と殺し我もまゝとことみ死し世の

人口を塞ぎて以て天下泰平の功を為す是則ち死

間あるも君み殉忠あるも者益夜心み工夫して行ふ

のぎんば在るべからずとんかり気ふ去ひ棄て寐所み

入らせめふみぞ案下四郎左工門の傍みおへ一本交

み對ひ目今の御意の教き咱們が拍み徹せが生

得魯鈍ある故ふる解せざる所あり和殿の才智凡

源平物語

切下

まろねが推察せられし所ありん顔ふの示教み預  
 りとと問ひつけらして依波守の須史思按の辨  
 ありしが我が輩の令際あり君の深意のありくみ  
 窺ひ知るべしやうもあろねど依波が推量する所  
 は是ふやろんと言ひつても扇を以てその上み加  
 へる池田等四五人の名前を書て見するみぞ四郎  
 左工門核子とあち貴所の明察寔み然り今ぞ  
 散居が老後の望を達する時節とまじりと愉快  
 の色を露いせむ本多の尚もさ寄つて和殿の令の國  
 家の礎是忠臣の龜鑑なりとみ追もあれたまなぐ  
 兎賢と他へ泄らささあともみ板倉領きて俱み退  
 出為りける余程み大坂みての準備万般整ひあ  
 来る廿八日み上京あるべし頼き成二條の城へ申し入  
 れらと憊く廿七日より供方の面々あり総て大坂の城  
 へ集り其夜丑の上刻み右大臣秀頼公の城中を  
 進発せられ伏見迄の船路あり是れみ依と淀坂方

源氏物語

初下十四

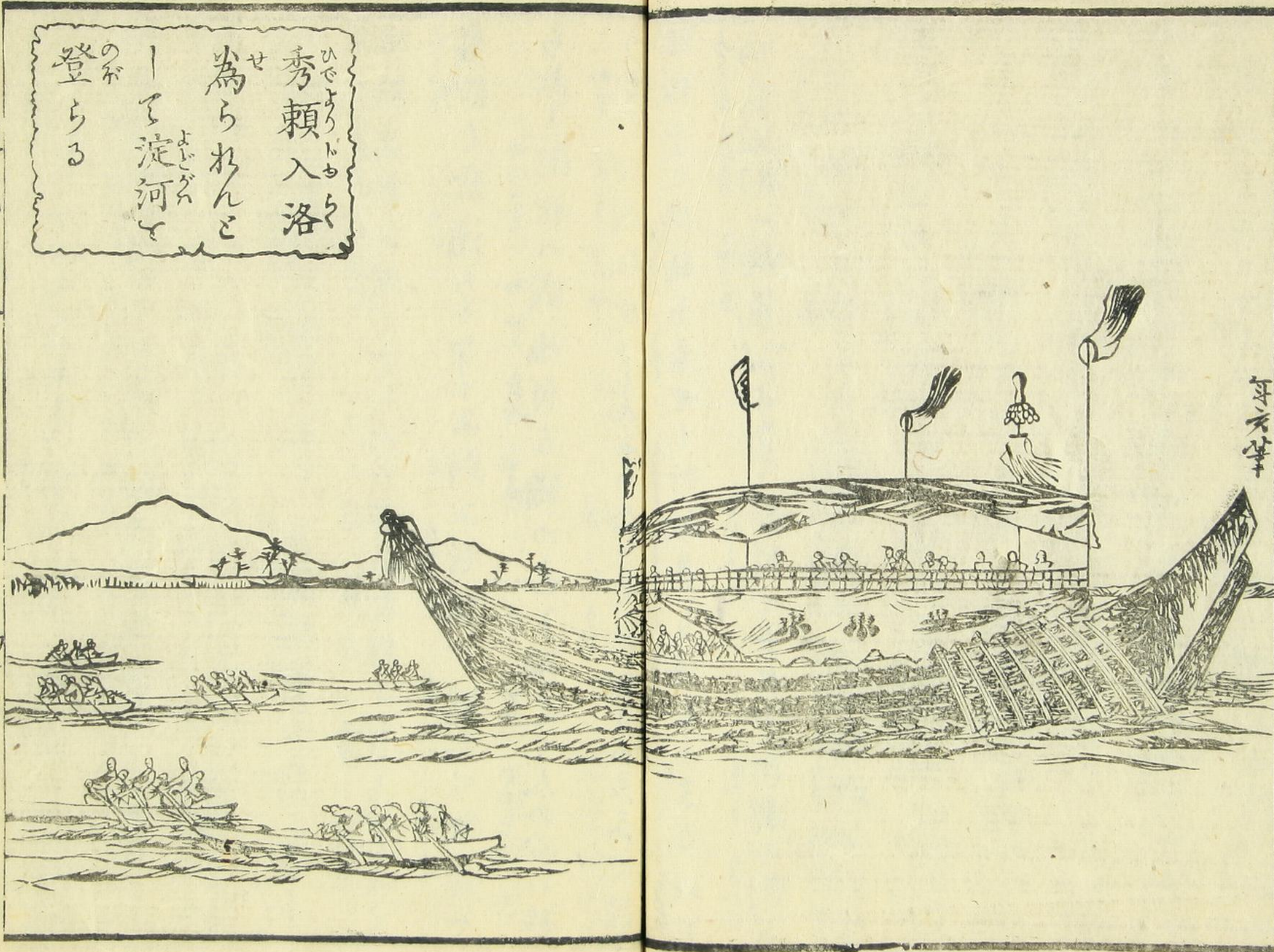
等総て陸路の警衛の清正が手勢をみて嚴重に  
 固めに或は弓組鑓炮組あど一隊の物頭が  
 ぶの組子を率へて兩岸の堤を歩きて御座船  
 とあん守護あせり左右まらうち伏見み列と  
 秀頼是より乗輿しり前駐の江及の押領使  
 佐々木入道女入り此勢凡百五十人次み当家  
 の旗奉行郡主馬之苑と先とて長柄鑓炮等  
 陸續して隊伍と乱さぞ引続の徒士二百人何とも

緋緞子の陣袍を着せ一行粧最も清らうあり此日  
 福島正則の病氣みよりて陪従せざれど所乗の側  
 の日本無双と喚とら加者清正池田輝政浅野幸  
 長片桐且元の四名何れも厨斗目麻上下の股立を  
 高く取上げ切結の草鞋を履あらしり其他木村長門  
 守大野主馬等を始めとて強強の壮士三十人とも同根  
 の赤松みて輿の左右を警衛せり後従の七手の番頭  
 一隊とみ備へて立て大いふ武威を輝しぬ総て返回

長柄鑓炮

初下





ひでよりトモ  
秀頼入洛  
せ  
為られんと  
よきがら  
て淀河  
の  
登らる

長七郎

初下

の上洛じやうらくのとめてのと支しあはせびが善美ぜんびとつ尽つさぬと支しゆゆぬぬの  
 殊更ことさら清正以下せいせいぎやうの三将さんしよう歩ふ行こう股か立たみて供ともせらるる支しゆゆのとや  
 大御所おほごじよあはせびとて斯くると支しゆゆあの至いたるまどりたが是これ備ひとへあ古こ  
 太閤おたごうの旧恩きゆうおん深ふかき故ゆゑあらんとこる者もの感賞かんしょうあらんのとあらず  
 秀頼ひでより虚きよ弱じやくみ渡わたらせる人ひとと常つとみ奥殿おくでんみ音ねちちとなひて  
 容貌くわうがうも最清さいせいららるらみ躬みみ冠かん服ふくと装まひて乗のり乗のりせ  
 られ一形状あひさまの威權おけん自みづかと備そまひまるる誠まこと見みて人ひとの心こころの移うつ  
 りやすらぬら太閤おたごう在ありし世よにあらしめしるらんのみなからとと歡よろこびびあらんと請まを  
 み涙なみだを催もよほすもあり思し慮りよ浅あき雜人ざつじんぞらるる初はつ君きみとら傾かたけん  
 と関東かんとうあはてせらるるも加藤かとうが如ごとき英えい勇ゆうが草鞋くさぎでな  
 供ともをまるる勢せいひてのあらる及およふ支しゆゆあらむと種あま々ご評判へうはんを  
 做なせとそ介さいハまと大御所おほごじよの秀頼ひでより伏見ふし見み着き船せんと  
 听きくと義直ぎちく頼宣らいせん兩公りゆうこう達だつと御迎おんむかひとて遺つらひされりぬ  
 途とちう中ちゆうみぬ終はてる行ゆ逢あれらるは是これみよ依よりて兩公りゆうこう達だつの急いそぎを駕か  
 より立たち出いでる平砂ひらさの上うへみおへらるら夫それとらるらるら秀頼ひでよりみ  
 も下乗げりやうせられんと為らしては清きよ正まさ禁かみめてる言いふらるらるら

良たしと

初下

君きみの従したが一位いちゐ右大臣みぎのちじんなり莫なぞ下乗くだりみ及およぶるべき乗のり乘りの終はつみそ所ところ挨拶あいさつ投遊なげあそびばさせらるる苦くる一ひとかゝらずと大音声おほいなるこゑ  
 小喚よめりるみぞ秀頼ひでゆり公こうの其その後のちみ西公さいこう達たちふ所ところ會あひまひ叙しよあり  
 り斯しか二條ふたじょうみ列りらせり人ひとが家康けいやす公こうみも衣冠いこうと正ただされ  
 端はた近く追出おしだ迎むかひせりる所ところ時とき清正せいせい思おもふやう君きみも右府みぎのふ  
 あり在ませど親父おやぢの先官せんくわんあるのをと別わかて孫まご婿むこありと  
 見下みくだ一ひと未坐みまみ居いんの必定ひつていあり倘たゞ其時そのときの太閤たいたくの御ご  
 遺い言ごひ出でし君臣きみぢんの義ぎをを押立おしだて渠ちと未坐みまみ  
 引ひあり一ひと孫まごて虚弱きよじやくと侮あはれりて園うゑん東方とうほうへ媚めい詣ぎふ諸しよ大名だいめい  
 ら等らみ泡吹あわふせんと八方やちほうみ目めと配まりて並居なる諸しよ侯こうみ一  
 禮れいあり秀頼ひでゆり公こうみ附従つけしたがへは輝政てるまさ幸長ゆきなが且かつ元等もとらも俱ともみ  
 心こゝろと配まりて君きみの左右さゆうを守護しゆごありて奥おくの一間ひともへ徐々しゆじゆと  
 うち通とほり行ゆく形勢かたせまの四辺しよへんを拂はらふむらうあり然しかれど  
 り大所おほいなる所ところの威いと震ふるへり氣色けしきもなく秀頼ひでゆり公こうの泣なみ  
 手てと取とりて上段じやうだんの間まみとは儀ぎ緒しゆ一ひとき身みの二ふたを討うちり  
 由よし下くだりて双ふたをはと膝ひざみ下くださせらるる君きみの久ひさくは意い得えざ

りし先以て健く御成長在らせらるる俺們におおむても

満是せりと一札を倣しゆみぞ清正勤しく心と安んじ

我が君の所若年駿府公のふん歳といひ殊にの景

君あまは夜對座ありて然るべしと言上ふ及ぶ程の秀

頼も坐と避く夜挨拶を演らるれど大御所の尚席

と勤りぞ清正の對のせらるる以後の免もあま今日を

珍客への夜馳走あまは我への斟酌無用あり夫の

就ての如藤をぞりめ維々も遠路の陪從苦勞あり

そと懇ろみ何れも辞を賜りて是より饗忘み及ぶ

ふも渠等が心を安んぜん男子の一個も席み入る

ず阿茶の局と頭として配膳のさる女中あり殊に

大政所 古太閤の簾中みく三條 ありも当席み招うせられて

俱み酒宴み及びきつ清正以下の四人も同席み入

らして大御所自々相伴たり然れども且元の尚侍

惑る所あまは我と出づるやう秀頼公の御幼

少より附隨ぐひまのらせて平常の御食事とも且元

長七

初下

お給仕奉まじり今日きょうの義ぎも同どう振びみ御免ごめんを蒙まうり申まう  
 すべすべーとく君きみの側かたわらみ坐まをあめつ酒食しゆじきと少すくし由よしま  
 めめくせせず大御所おほみよみみる片桐かたぎりが誠忠まことちゆうある致感えんドラらま  
 市正いちのま苦くるしかかくず給仕きやうじの隨ず素するるるづづれれが右府うふ秀頼ひでよりへ  
 備そなゆるる振部びんぶみ於あて毛頭もうとう疎畧そりやくの品しんを差さめす若年わかくねの  
 秀頼ひでよりみ食味あじみと以もつて怪我けがああくせせてての末代まうごのたま逆さかも家康いえやす  
 が悪名あくな道みちまがささけけを不実ふじつの拳動けんどう掌ててああ各おの  
 隔くわい意いああるるべべくくずずと折うち放ち寛ろがろきき風情ふうじやうみみく秀ひで  
 頼公よりともの器うつらの魚菜ぎよさいを狭せまとて食く一杯いぱいああるる何なにもも勘かんしく  
 安堵あんどしてして軀みて酒食しゆじきも終おひ里りのの先まづ御休息ごきゆうぎああるるべ  
 とく大御所おほみよみみの退坐たいざあり大政所おほまんどらの秀頼ひでよりみみうち對むかひ  
 れれて物もの終はりりせせるるうち清きよ正まさ等ら四人しにんみみ  
 別席べつせきを賜たまりりて休息きゆうぎみ及およぶぶれれ音ね最さい懇こんろろみみ念ねんじ  
 ららくくと遠とほががに固辭こじするする支えと得えむ木村きむら以下いげの面々めんめん  
 と内次うちぎみみ並ならびび獲とららししめめ一ひと間ま隔へてて一ひと別席べつせきへへ口人くちび  
 齊ひとしく趣おもひひにに余あららししめめ板倉いたくら四郎しやうらう左工さこう門かどみみの曩な

頼公の器の魚菜を狭とて食一杯ある何も勘しく  
 安堵して軀て酒食も終里の先づ御休息あるべ  
 とく大御所みみの退坐あり大政所の秀頼みうち對ひ  
 れて物終りせるうち清正等四人み  
 別席を賜りて休息み及ぶれ音最懇ろみ念じ  
 らくくと遠がに固辭する支と得む木村以下の面々  
 と内次み並び獲らしめ一間隔て一別席へ口人  
 齊しく趣ひに余らしめ板倉四郎左工門みの曩

長しとつて

初下二二

六所<sup>ふろ</sup>の御前<sup>みまへ</sup>みて死間<sup>しげん</sup>の活物<sup>かつぶつ</sup>禊<sup>け</sup>りあり旦佐渡守<sup>たんざどしゅ</sup>  
 正信<sup>まさのぶ</sup>より助言<sup>すけごん</sup>せしれ一所<sup>ひとところ</sup>もあり余<sup>あ</sup>らぬごみ板倉<sup>いたくら</sup>の加<sup>か</sup>  
 藤池田<sup>とういけだ</sup>等<sup>ら</sup>甲<sup>か</sup>しが秀頼<sup>ひでより</sup>公<sup>こう</sup>を守護<sup>しゆご</sup>ありて上洛<sup>じやうらく</sup>あるの顔<sup>かほ</sup>き  
 を傳<sup>つた</sup>へ听<sup>き</sup>する時<sup>とき</sup>よりして初<sup>はつ</sup>る名譽<sup>なごよ</sup>の面<sup>めん</sup>くが心<sup>こころ</sup>と一致<sup>いちじ</sup>  
 まるみ於<sup>お</sup>ての大坂<sup>おほさか</sup>の武威<sup>ぶゐ</sup>輝<sup>か</sup>きく関東<sup>かんとう</sup>のあん為<sup>な</sup>る  
 是<sup>これ</sup>狼<sup>おとし</sup>人の病<sup>やまひ</sup>ひありと豫<sup>よ</sup>る苦<sup>く</sup>意<sup>い</sup>せし折<sup>をり</sup>くするまじ  
 是<sup>これ</sup>ぞ忠義<sup>ちゆうぎ</sup>の為<sup>ため</sup>納<sup>おさ</sup>めと万般<sup>まんにばん</sup>工夫<sup>くふう</sup>を回<sup>まわ</sup>らせし暗<sup>あん</sup>ふ  
 害<sup>わざはひ</sup>の防<sup>ふせ</sup>ぎ可<sup>べ</sup>き古語<sup>こご</sup>もあり毒<sup>どく</sup>殺<sup>ころ</sup>する  
 の外<sup>ほか</sup>あつド尤<sup>なほ</sup>計畧<sup>けいりやく</sup>圖<sup>ず</sup>の中<sup>なか</sup>も即<sup>すなは</sup>ち坐<sup>ま</sup>み死<sup>し</sup>する  
 至<sup>いた</sup>りての密謀<sup>ひそめい</sup>忽<sup>たち</sup>地露<sup>ぢろ</sup>頭<sup>づ</sup>して君<sup>きみ</sup>の御名<sup>みな</sup>と汚<sup>けが</sup>まみ及<sup>およ</sup>  
 はん月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>経<sup>へ</sup>るみ従<sup>したが</sup>ひて其<sup>その</sup>妻<sup>つま</sup>自然<sup>しぜん</sup>と的<sup>てき</sup>の中<sup>なか</sup>あすやう  
 調劑<sup>てうざい</sup>せずんば在<sup>あ</sup>るべくずと偷<sup>ひそ</sup>くみ班猫<sup>はんねこ</sup>の毒<sup>どく</sup>と求<sup>もと</sup>  
 めてあまを饅頭<sup>まんぢう</sup>の餡<sup>あん</sup>み加味<sup>かみ</sup>し救<sup>きう</sup>五<sup>ご</sup>ツとが准<sup>じゆん</sup>儀<sup>ぎ</sup>し  
 多<sup>た</sup>成<sup>なり</sup>白木<sup>しろき</sup>の折<sup>をり</sup>の裡<sup>うち</sup>みあさめ未茶<sup>まいぢや</sup>一器<sup>いつき</sup>を持<sup>も</sup>副<sup>そ</sup>て二  
 條<sup>じょう</sup>の城<sup>しろ</sup>み赴<sup>おもむ</sup>きつ若<sup>わか</sup>死<sup>し</sup>折<sup>をり</sup>もぐるると窺<sup>うかが</sup>ふ所<sup>ところ</sup>み今<sup>いま</sup>清<sup>きよ</sup>正<sup>まさ</sup>  
 等<sup>ら</sup>四人<sup>よにん</sup>の面<sup>めん</sup>々<sup>ま</sup>別室<sup>べつしつ</sup>みありて休<sup>やす</sup>息<sup>いき</sup>あせば是<sup>これ</sup>幸<sup>さい</sup>ひと

良<sup>よ</sup>下<sup>げ</sup>ヒ一<sup>いち</sup>

我わがと入り今日けふの痕あとを成な勞らう以もつ杯は一いつつ更さらみまゝと言いへるやう  
 倅せいの伊い賀が守の吏をへ当時たうじ所しよ司し代だいたるふ仍なほと所しよ馳ち走そうある  
 で愜なへざる当たう職しやくの者ものあまども折あり公こう務む世せ結せくを  
 して公こう等とうみ見みゆる吏しをさへ得えぎ然しかるふ目め今いま 禁きん中ちゆう  
 より御おん箸しゆ下かのお残のこりとして是こゝる品しんを頂たう戴たい為なされば  
 這こへまご得えがさき幸さいひ故ゆゑふ茶ちや一いつつまのせんいんと隱いん居き役やく  
 相さう応おうふこを近ま伺し公こういへたりお茶ちやも調てう進しん致しむべけ  
 れど先まづ御ご賞しやう統とう下かさるべしとて折ありの裡うちある饅まん頭とうを  
 一いつつづ取とり分わけく加か藤とう以い下かふことを差さめ残のこる一いつつを

我わがが前まへみ置おけい清きよ正せい自じ餘よの面めん々くも豫よて懇こん意いの板い  
 倉くらあまど斯くる時ときも由ゆ断たげば茶ちやけり音ね一いつ礼れいを  
 るのを熊くまと除よ談だんふ及およぶみぞ板い倉くらも又また落お付つ顔がみ  
 程ほどよくあまみ回い答たを為なさぐる軀かて一いつ服ふくの茶ちやを點てて先まづ  
 自おの己れが飲の試しと別べつみ一いつ服ふく點てたる我わが四し人にんり前まへみ差さ出して  
 茶ちやの湯とう加か減げんも宜よろしけとば卒い召めとよと差さむとば且かつ元げん  
 のさうげなく彼あ饅まん頭とうをな一いつ頂たうき斯くる御ご縁えんみ觸ふとぞ

浪花史畧

んバ御箸下の酒菓子とび頂戴する夏愜ふべき幸  
ひ小生八旬ふ餘れる母のゆへに渠み頂戴致さんべいと  
夫とんあみ加藤等み心付せり慢頭を懐中多さんと  
まら筋由板倉の是を見て南無三渠み持飯らとて死  
間の密計多うざるのそり世の嘲りと免くれずと心を痛  
むる一世の浮沈效みあつて板倉が奈何ある智辯を揮  
つるあらん開の次の編を見て知るべし

浪花史畧第一輯卷之二終

# 漢語消息往来

中形

全一冊

# 漢語圖解

中形

全三冊

# 習字漢語篇

深澤美潭筆

半紙本

全一冊

# 音訓開化名頭

安齋美雄著

半紙本

全一冊

# 輿地暗射圖手鑑

横須賀安枝著

横本

全二冊



朝鮮國細見全圖

半紙形

全一折

朝鮮事情

半紙本

全二冊

說教心得草

中形

全六冊

浪花史畧

染寄延房著

中形

初編ヨリ  
五編迄

東 京 書 肆

須山	小岡	和須	和須	藤和	森	山	鶴	純	丁	丁	丁
原	田	泉	泉	泉	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
茂	新	嘉	市	伊	金	勘	慶	治	藤	喜	喜
兵	兵	兵	兵	兵	右	右	次	兵	兵	右	右
衛	衛	衛	衛	衛	衛	衛	衛	衛	衛	衛	衛
七	七	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八

